

枚方市市制70周年記念 東海道枚方宿本陣跡碑を寄贈 三矢公園で除幕式

本会は、枚方市が市制七十周年を迎えたのを機に、市へ「東海道枚方宿本陣跡碑」を寄贈しました。除幕式は10月5日、かつて本陣があった三矢公園で実施、建立委員長の上谷勝己本会副会長の司会により関係者による神事が行われ、本会会員である意賀美神社の正田和男宮司からの御祓を受けました。

神事が終わると、市の関係者にも参加いただき、伏見隆枚方市長、高野寿陞市議会副議長、大西忠枚方文化観光協会理事長、堀家啓男本会会長、畠田恵美子同相談役により除幕式が行われ、



幕され、本陣跡碑が姿を現しました。碑の表面には「京街道 大坂街道 東海道枚方宿本陣跡」、裏面には「枚方市市制施行七十周年記念 寄贈 宿場町枚方を考える会 平成二十九年（二〇一七）十月五日」と刻まれています。



除幕式の終了後に記念撮影



第86号

発行

宿場町枚方を考える会
会長 堀家 啓男
072-892-5504

事務局

枚方市出口2丁目6-6
上野幸夫 072-832-5722

編集 広報委員会

主な内容

- 枚方宿本陣跡碑を寄贈（1頁）
- 大名、旗本の陣屋跡を散策（2頁～5頁）
- 熊野街道の石造品を訪ねて（6頁～9頁）
- ふるさと絵図の制作に参加（10頁～13頁）
- 歴史上の女性の呼び名（14頁～16頁）

近郊を歩く会

大名、旗本の陣屋跡を散策

三栗 石川 勲

「宿場町枚方を考える会」の恒例行事「近郊を歩く会」は平成29年5月28日(日)、**天名 旗本の陣屋跡おひゆかりの地を訪ねる**と題して、牧野から三栗を経由して御殿山神社までの約2・5kmを散策しました。

「近郊を歩く会」は現地集合・現地解散が原則です。午前9時30分、京阪電車牧野駅東側のロータリー広場に会員など38人が集合、ガイド役

の堀家会長からコースや注意事項など、簡単な説明を受けると、明治橋を渡って最初の訪問地である片埜神社に向いました。

旗本水野家陣屋跡

一帯はかつて坂村と呼ばれ江戸時代は旗本水野家の知行地だったところです。知行地は、河内、大和、近江などに分散していましたが、合わせ

ると5700石の大身でした。当初、支配する陣屋は上島にありましたが、寛政年間(1789年〜1800年)に片埜神社の社家である岡田本房(おかだほんぼう)水野家の家老となり、後に陣屋代官を務めるの働き掛けもあり、坂村に移設しました。

場所は、旧枚方市史では「牧野停留所より1町許り新道を東方に入った右手の畑地である」となっています。(現在

の具体的な場所は別項を参照してください)

片埜神社

社殿によると、創建は垂仁天皇(第11代)年間で、古くから旧交野郡の一之宮、鎮守神として崇敬されてきました。



かつては広大な社地を有していましたが、戦国時代の兵火に遭い荒廃していました。天正11年(1583年)に豊

臣秀吉が修復、大坂城築城の際、良（うしとら）の方角にあたるため、大坂城の鬼門鎮護の社と定めました。

本殿は国の重要文化財、主祭神は建速須佐之男命（スサノオ）と菅原道真です。

らんぱん公園

続いて、片埜神社の南門から南西に約100mばかり進むと、かつての三浦家邸宅跡が公園になっています。

三浦家は、江戸時代の中頃から代々この地で医師を務めていました。歴代当主のうち、三浦蘭阪（みづららんぱん／1765年～1843年）は著名人で、本業の医学はもちろんで、本草学（博物学）、金石学、考古学などの多岐にわたる著作を残しています。また、詩歌、随筆、文芸などの才能

を現しており、前述の岡田本房とも親交がありました。平成19年、当主の義徳さんから邸宅跡が市へ寄贈され、「らんぱん公園」となりました。古木を生かした市民の憩いの場となっています。



片埜神社一の鳥居

「らんぱん公園」から穂谷川を渡り、さらに南西方向へ進むと片埜神社の「一の鳥居」

があります。正確には「ありました」というのは、阪神淡路大震災の後、倒壊の恐れがあるため解体されています。解体された石材は、現存している灯籠の脇に残されています。その石材の一部には、陣屋代官で社務職でもあった岡田治左衛門本房の名前、その肩書に「封主水野監物内（左写真）」が刻まれています。



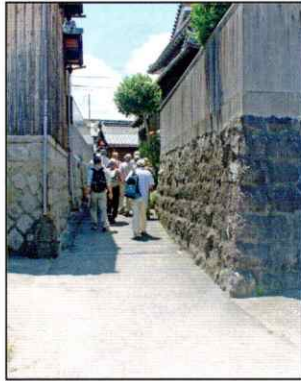
一の鳥居は旧京街道（東海道の一部）に面しています。鳥居は神域と人間の俗界との境界（結界）であり、一の鳥居は一番外側にある鳥居です。つまり、片埜神社の南門側神域の最も外側がここだったこととなります。ここは南門から直線で約500m余り離れています。かつての片埜神社の広大さが想像できます。

三栗

一の鳥居から旧京街道に沿って下ると、京阪電車の踏切があります。その先の集落は旧河内国交野郡渚村の枝郷である三栗です。

現在の三栗は宅地開発が進み、一帯は住居表示も三栗1丁目、2丁目となっていますが、枝郷の三栗は1丁目にあります。枝郷の三栗は、京街

道を往来する人が増加した江戸時代の初期に、本村の渚村から移ってきた人々によって街道沿いに形成されました。淀川の自然堤防の上に往還筋を挟んで、北側に本屋、南側に納屋や下便所を配置する独特の屋敷構成でした。また水害対策として、淀川側に高い石垣を築き、家屋はその上に建てられました。その名残を留めている家もあります。



渚院跡

三栗の次は渚元町にある「渚院跡」を訪ねました。渚

院は、文徳天皇の第一皇子だった惟喬親王が皇位継承争いに敗れ、在原業平らと交野ヶ原での鷹狩り、作歌、饗宴花見などで憂さを紛らわせた場所として知られています。時が流れて江戸時代になると、渚院および一帯は荒れ果てていました。寛永年間（1624年～1644年）、この地を訪れた領主の永井伊賀守尚庸（淀藩主永井尚政の三男）は荒廃した様子を哀れみ、惟喬親王・在原業平時代の風雅を取り戻すことに尽力しました。尚庸の家臣である杉井吉通は、事の次第を碑に残したいと願い出ました。碑文は尚庸が託した儒者林鷺峰による格調高い漢文で記されています。

この石碑は渚院跡に現存していますが、寛文元年（1661年）に建てられたもので、

すでに300年以上経過しており、風雨による劣化で読むことができませぬ。幸い、判読できる時期に写された拓本、御殿山神社板書などの資料が残っており、平成14年に枚方市・枚方市教育委員会・渚院を考える会により翻刻碑が建てられました。



石碑が建てられてから、さらに100年以上経つと、一面観音菩薩を本尊とする観音寺が建立されました。しか

し、神仏分離令により明治3年に廃寺となりましたが、鐘楼と梵鐘は現存しています。

御殿山神社

最後は渚本町にある御殿山神社です。起源は観音寺に隣接して建立された粟倉神社（現在は小倉町）の御旅所でしたが、文政年間（1818年～1831年）に八幡大神（品陀和気命／応神天皇）を勧請して西栗倉神社と称しました。さらに明治の神仏分離令により、御殿山に社殿を造営、明治3年9月に遷宮して御殿山神社と改称しました。御殿山の名称については、永井伊賀守尚庸が知行地支配のための陣屋を建てたことによると考えられています（異説あり）。御殿山生涯学習美術センターの建設前に実施さ

れた発掘調査で、弥生時代から平安時代の住居跡や江戸時代の建物跡など、陣屋に関する遺構も見えています。



別 項

水野家陣屋跡

推定場所は

交野市 堀家啓男

機関誌85号の「大名や旗本陣屋跡を探る」で旗本水野家陣屋跡を牧野公園近くのマ

ンション「メロディハイム枚方牧野」の地あたりとして記述しました。その後、枚方市文化財研究調査会にお聞きしたところ、この地は平成8年（1996年）に文化財の試掘調査が行われており、江戸時代の遺物は見つからなかったそうです。陣屋跡としてマンションと小公園の写真も掲載しましたが、いずれも削除させていただきます。

改めて阪周辺を歩いて探索しましたところ、マンション南側の小さな段丘の上に民家3戸の間口を合わせて陣屋跡にふさわしい長方形の区画を見つけました。この民家3戸の前の道は、西へたどると京街道につながっていますし、東隣りは清岸寺で山門前の道につながります。枚方市史第3巻によれば東西20間南北20間の陣屋であったそうです。

間口の長さもほどよく、陣屋門があつたとすれば、寺の山門と連なり江戸時代の光景が目に見えます。市税務の土地評価参考図（参考図1）でも陣屋跡らしき長方形の2区画を当てることができます。



同じ参考図で船橋1丁目の永井家の船橋陣屋跡の区画（参考図2）ははつきりした長方形でよくわかります。



旗本の陣屋の仕様がどことも同じようなら水野家でもまとまった形で片野神社の東北の松林の一面を確保したのではないのでしょうか。

陣屋の整備は寛政年間であり、当時、片埜神社関係者であった岡田本房が水野家の代官を兼ねていたことから、そうしたことも可能であったと思います。

想像ばかりですが、明治元年（1868年）3月、明治天皇が鳳輦に乗り、京街道を下り大坂へ行幸されたとき、小休されたという由緒のある旗本水野家陣屋跡です。

これは私の希望ですが、いつかこの辺りで遺物が発見、発掘されることを期待しています。そうならば、水野家陣屋跡と明治天皇小休所跡の説明板が現地に立てられるかわかりません。

熊野街道の石造品を訪ねて

門真市 辻他 久雄

はじめに

地域の片隅にひっそり眠っている石造品の数々に巡り会うことがあります。それは私にとつてささやかな喜びの瞬間でもあります。

有名な神社仏閣や博物館において文化財として大切に保存・管理をされている石造品もあれば、今もなお市井にあつて、多くの人々から崇拜の念をもたれ、信仰の対象とされ続けている地域の石造品も数多く現存しています。

しかしその一方で、地域の片隅に無造作に取り残され、人々の記憶からも忘れ去られ振り向く人もなくなつたそれらもまた、数多くあるのも事実です。近代的なビルとビルの谷間に取り残されたものや、旧道の名残を留める辻や道端に人知れず佇む物もあります。その存在を今日までも、息を

ひそめて立ち尽くす道標や古びた祠や背丈ほど伸びた草木の野山に眠る石仏も、またそれらの一つであります。

石造品に刻まれて、消えかけた年号や文字の一字一字に、歴史の深さや重さ、人々の思いや願いの丈を感じることができます。私にとつて歴史との出会いであり、心が弾む瞬間でもあります。

それらが造られた当時は、多くの人の目にとまり、人々の生活の中にその存在感を与えていたことでしょう。それらの前を大勢の旅人や民衆が通り過ぎて行つたに違いありません。あるいは、その前で立ち止まり、跪き手を合わせて祈つたかもしれません。

往時に思いを馳せるなら、名もない人々の日々の営みの中での喧騒や喜怒哀楽をはじめ、旅の無事や極楽往生を願

う祈りや、大切な者への供養や鎮魂の祈りなど、声なき声までもが聞こえる思いがするのには私だけでしようか。

文化財として位置付けられている物を除き、その多くが開発という名のもとに、時代とともに消失していく運命にあることも事実でしょう。しかし、時代を生き証として、地域の風土に培われた生活や伝統・文化を後世に継承していくことは、私たち後世を生きる者に課せられた使命でもあります。責務かと思えます。一度喪失した伝統・文化や歴史を取り戻すことは、それ自体、至難の技であることも、紛れもない真実かと思うからです。

熊野街道・熊野詣

紀伊の国に通じる道は、古代日本の五畿七道の一つである「南海道」と呼ばれていました。しかし、平安時代中期

には、京から摂津・和泉を経て紀伊半島の山々に囲まれた聖地、熊野三山（熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社）を指し、人々が歩いた熊野詣の道が「熊野街道」と呼ばれるようになりました。

「熊野詣」は平安時代の延喜7年（907年）の宇多法皇の巡拝をもって始まるといわれています。その後、数多くの上皇や法皇に留まらず、時代とともに武士から庶民へと広がり、「蟻の熊野詣」といわれるほど盛んになりました。

京都から船で下った人々は渡辺の津、現在の天満橋辺りで陸に上がり、熊野詣の第一歩を踏み出しました。江戸時代になると、船着場は「八軒家」と呼ばれるようになり、三十石船や淀川の荷客輸送の発着場として賑わいました。

渡辺の津周辺に、九十九王

子の第一王子社である「窪津王子」が設けられました。現在、窪津王子は四天王寺の西南、茶臼山にある堀越神社の撰社、「熊野第一王子之宮」に祀られています。人々は、この窪津王子から九十九王子を辿りながら熊野三山へ向けて旅をしました。なお、「王子」とは熊野権現の化身として巡礼者を守護する御子神を祀った社です。人々は、ここで旅の安全を祈願し、疲れを癒しました。

波太神社遙拝の鳥居

大阪市内にもたくさんの子跡や史跡がありますが、今回は大阪の南、阪南市を訪ねてみました。山を越えると和歌山に入り、紀州街道と合流する熊野街道沿いには、今も由緒ある寺院が数多く点在しています。

まずは、JR阪和線と和泉

取駅から歩くことにしました。駅前には、「延喜式」に記載されていることから「式内社」として知られています。波太神社の遙拝の大きな石の鳥居が目に入ってきます。

鳥居の近くには、浄土宗の是徳上人による「南無阿弥陀仏」と自然石に彫られた六字名号碑があります。今もなおそこには季節の野の花が供えられ、地域の人々の篤い信仰の対象となっていることがうかがえます。



波太神社鳥居

六字名号碑

琵琶ヶ岸懸

熊野街道は、山中川の溪流に沿って「琵琶ヶ岸懸（びわ

ががけ）」という難所を通ります。「泉州志」によると「琵琶法師が谷に落ちて、背負っていた琵琶が途中の木に引っ掛かっていたとのこと。また深い溪流の音が琵琶の音に似ていることによる」とあります。往時の人々も紀州に入る前の難所の一つ、溪谷への足場が悪く、通り抜けるのには注意が必要だったかと思われま

地藏堂王子跡

江戸時代になると紀州街道となり、道は補強されて通行の安全が図られました。廃止された現在は、山中橋、滑下橋と、府道に沿って歩くことができます。

現在、浄土宗地福寺にある「子安地藏」は、もとは地藏

堂王子のご神体であったとき
れています。

地福寺・枝垂れ桜

地福寺は、紀州街道の山中宿に入る入口付近にあり、境内に植えられている枝垂れ桜が有名です。私が訪れた時にも目を見張るほど見事な桜を堪能することができました。



地福寺本堂と枝垂れ桜

馬目王子跡

しばらく国道(街道)に沿いながら歩くと、大阪で最後の王子である「馬目王子跡」があります。昔はウハ目王子、宇麻目王子とも称されていま

した。馬目王子のご神体は山中村にある山中神社に祀られているといわれています。また、地域では「足神さん」と呼ばれ親しまれています。

山中宿

山中宿の入口にある地福寺までの旧街道沿いには、このような石碑や物墓跡などが見られます。高速道路の開通による影響か、神主山墓地が廃墓地となり、数多くの石造品が山の中に散乱しています。「享保七歳/施主了元」の名が残る六地藏などの石仏が、今では訪れる人もなく、ひっそりと夏草に被い尽くされて、その苔むしたお姿を留めておられました。

現在は山中宿の町並みが整備され、街道は石畳が美しく敷き詰められています。築後150年以上といわれる江戸時代の旧庄屋建物である田中

家住宅をはじめ、宿場町として栄えた面影を偲ぶ民家があり、こちに見られます。重厚な屋根瓦、土塀に囲まれた旧家、格子窓や土蔵を備えた民家も見られます。紀州公の参勤交代時に使用された旅宿である山中宿本陣も現在は個人宅になっていますが、周囲の土塀や広大な庭の老木、正門前の幅広い溝などが今も残っています。



山中宿本陣跡

山中宿は、雄ノ山峠の北麓の山中村に置かれ、和泉の国

と紀伊の国を結ぶ要路でもありました。山中宿の中には、時代の古い石造品もまた数多く見付けることができます。いつの時代に建てられたものかは定かではありませんが、「澤四郎善眞碑」という石碑が小さなお堂の建つ境内にあります。碑文には、「紀州岡崎□澤四郎善眞/承暦二乙丑天/八月上八日」とありますが、干支に誤りがあります。正しくは、承暦3年は乙丑(きのとうし)ではなく、己未(つちのとひつじ)になります。西暦でいうと1079年で平安時代後期の白河天皇の時代と重なります。澤四郎なる者が、紀伊の国から仏像を持って転居し、山中村に氏神がなかったので安置したのにはじまる。勧請して山中神社を分社したというものであります。(山中神社由来記より)

JR阪和線の山中溪駅の前を熊野街道（紀州街道）が過ぎる頃には、山間を流れる山中川の両岸に約千本のソメイヨシノと山桜が、春には見事に咲き誇り、多くの花見客を集めています。さらに険しい山間を街道は続きます。

山中関所の跡碑

左手の山を少し入った所に「山中関所の跡碑」が残されています。山が迫り、間に川があるという、関所として適した条件を備えていた山中には、南北朝の時代に関所が置かれていました。当時の関所は、通行する人馬や荷物から通行税を徴収していました。関所にはうってつけの場所であつたかと思われず。

熊野詣の人々が引きも切らず押しかけていた頃は、かなりの税収入が得られていたことでしょう。ここで課せられ

た関銭は、河内の観心寺に法華堂を造営するために使われたといわれています。これを記した長慶天皇の文書（正平24年・1369年）が残されていることから、そのことがわかります。



山中関所の跡碑

また、関所跡碑の近く、元法華堂があつた場所に「大乘妙典碑（供養碑）」が残されています。石碑正面には「梵字奉納大乘妙典／永祿一二年／六十六部／浄泉／供養所／九月吉日／敬白」。側面「六親券族」と彫られています。永祿12年は、1569年に

あたります。織田信長が初めてルイス・フロイスと面会し、京都での居住とキリスト教の布教を許した年でもあり、信長が伊勢を制圧した年でもあります。約450年も前の石の供養塔がこんな山の中に今も残されているのには驚きです。



經典供養塔

この經典供養塔のうち納経する石塔とは、大乘妙典である法華経を全国六十六ヶ所の霊場に納経する目的で六十六部作成し、廻国行者によって巡るものです。起源は明らかではありませんが、鎌倉時代に始まるといわれています。

一般的には「廻国供養塔」といわれるものです。

おわりに

これら見てきたように、石造品の数々に出会うことは、私にとって大きな楽しみでもあり、実際に触れて確かめられる貴重な歴史遺産でもあります。

つたない文章でありましたが、読んでいただいて、少しでも石造品に興味を持っていただけたでしょうか。街道を歩く楽しみ方は人それぞれと思いますが、こんな楽しみ方もあるんだ、ということが読んでいただけた方々に少しでも伝われば幸いです。熊野街道のほんの一部ではありますが、皆さんも自分なりの楽しみ方で歩いてみられたらどうでしょうか。きつと自分なりの発見や学びがあることかと思えます。

ふるさと絵図の制作に参加

岡本町 松井茂夫

ふるさと絵図交流会

平成28年12月6日、滋賀県草津市において環境省近畿環境パートナーシップオフィス(ぎんぎ環境館)主催の「過去を育て、未来を創る、ふるさと絵図交流会」と題した近畿ESD学びあいフォーラムが開催されました。

参加したのは、ふるさと絵図の活用に取り組む団体や検討している団体で、地元滋賀県下の地域を中心に、京都市北区や神奈川県葉山からも参加されており、地域住民、自治体職員、学芸員、大学生のグループなど多彩な人たちが集まりました。

ESDとは聞きなれない言葉ですが、ユネスコを中心に関連、各国政府が提唱する取組で「持続可能な開発のための教育」と訳されています。詳しくはわかりませんが、ふるさと絵図の作成とその普及がESDの趣旨に沿うものであることは確かかなようです。

フォーラムで岡本町を紹介

フォーラムは、今回岡本町ふるさと絵図のアドバイザーとしてご指導いただいた滋賀県立大学地域共生センターの上田洋平先生の基調講演から始まり、甲賀市土山町の山内地区、草津市矢倉地区、枚方

市岡本町の三団体が事例紹介を行いました。岡本町は羽田町内会長の挨拶と西村副会長から地域の紹介があり、私から岡本町ふるさと絵図の制作過程を中心にお話をさせていただきました。

左写真の説明に枚方宿くらわんか五六市の打ち水



枚方宿くらわんか五六市の打ち水

一般的に東海道は品川宿から大津宿までを五十二次とさ

れています。豊臣氏の滅亡後、徳川幕府が東海道を大坂まで延長して江戸大坂間を東海道と定めました。

**東海道は57宿
枚方は56番目**

京都と大坂を結ぶ京街道には、伏見、淀、枚方、守口の4宿がありました。この4宿を加えると、東海道は57宿となります。枚方は56番目の宿場であり、枚方で月1回開催する市民参加の市を「枚方宿くらわんか五六市」と呼び、今年で10年目を迎えます。

「くらわんか」とは、枚方宿沿いの淀川を行き来する三十石舟の乗客を相手に食べ物などを売っていた茶舟の掛け声だそうです。とても売り手が客に向かって言う言葉とは思えない乱暴な物言いですが、

幕府からもお許しが出ていたそうです。



歌川広重「京都名所之内 淀川」

そんな歴史を持つ京街道にある岡本町が、平成25年4月から3年間、環境省のヒートアイランド適応策モデル事業の実施地区に指定され、きんき環境館や枚方市環境総務課とともに、打ち水や緑のカーテン、雨水タンクの設定や井戸公園の整備などを行いました。その一環として、打ち水

や行水、蚊帳など、暑さを凌ぐための、今でいうエコライフが実践されていた昭和30年代の暮らしを、次世代に伝えるためのツールとして、ふるさと絵図を作成しようということになったわけです。以下、そのときの内容を引用して、ふるさと絵図の制作について紹介したいと思います。

ふるさと絵図を制作

最初は何かから手を付けていいのか分からないというのが実情でしたが、きんき環境館から紹介いただいた滋賀県立大学の上田先生のご指導のもとに、草津の渋川など、滋賀県各地で実施されているふるさと絵屏風の実例を参考に進めていくことになりました。まず、上田先生開発の心象図法という手法により、町内

のお年寄りに集まっていたいて、子どもの頃の暮らしや遊び、行事や風景の思い出を語ってもらい、絵図の素材を集めました。



茶話会「ふるさとの景色を語り合う」

この期間は1年余りかかりました。素材も揃い、いよいよ下絵の段階となったのですが、絵の得意な者は一人もおらず、絵画教室の先生に指導していただくことになりました。さらに、絵心のある知り合いにも声をかけてサポート

してもらうことになり、やっと実質的な絵図作成チームが発足したわけです。

下絵は画用紙で何枚か作ってみて、どの角度からみた構図がベストかを検討し、最終的に東南から俯瞰した構図に落ち着きました。

原寸大の下絵は、模造紙を張り合わせ、骨格となる道路や水路の配置を決め、鉛筆や木炭で描き入れました。ベイスの地図も重要ですが、絵図のテーマである昭和30年代の暮らしを描くためには、生き生きとした人々を描き込まなければなりません。

主役は後からじっくり描き入れることにして、まずはその背景となる地図をしっかりと描くことにしました。道や水路、川の色をどうするか、空や対岸の山々もバランスを考えて配色を選びました。

画材には乾きが速く、乾くと水彩のように水に滲まないアクリル絵の具を採用しました。これは重ね塗りができ、多人数で描くのに向いています。道路や水路、山や川、建物など、それぞれ担当を決めて分業で描きました。



シナベニヤ板への描画

描画にかかった日数は半年ほどですが、そのうち大半は背景に費やしました。背景が描きあがってからは、準備期間に集めてあった素材をほとんど

ん描いていったので、スピードはぐんと上がりました。

建物や道路を描くにあたっては、いわば昔の地図ですから、下調べが必要ですが、暮らしや遊びを描くのは結構楽しいもので、町内の子どもたちも喜んで参加してくれました。

描いている途中にも近所の方が見学に来られ、新たな資料提供や昔話も聞かせていただきました。「この踏切な、昔は遮断機なんかあらへんかった」と言われて遮断機を消すなど、途中でいろんな修正もありましたが、最後の大きなトラブルは三枚の絵を合わせるとき、ベニヤ板が湿気を含んで反ってしまったため、つなぎ目の絵が合わず、再度つなぎ目部分を描き直したことでした。

なんとか3年目の事業最終年度内に絵図が完成、アルミ

フレームで額装をして、岡本町会館の壁に設置できた日は、全員が大きな達成感を味わうことができたと思います。

この絵図には60年前の暮らしをできるだけ沢山盛り込みたいという思いがあったので、一年と一日の時間を凝縮して描いています。左から右へ夕焼け空から花火の夜空、明け方の空、昼の空へと変わっていく一日を、また春の桜から夏の盆踊り、秋のふとんみこし、冬の雪景色の団地と移り変わる1年の四季を左から右へと描いています。記憶をたどって描く風景と暮らしの絵なのです。

絵図の制作は
ジグソーパズル

皆さんはジグソーパズルをご存知だと思います。お年寄

りから昔の暮らしを聞くことが「ピースを一つずつ拾い集めること」であり、その「ピースを組み合わせることによりジグソーパズルは完成する」、今回のふるさと絵図は、ジグソーパズルそのようなものではないかと。今回、岡本町のふるさと絵図の制作に参加した感想です。

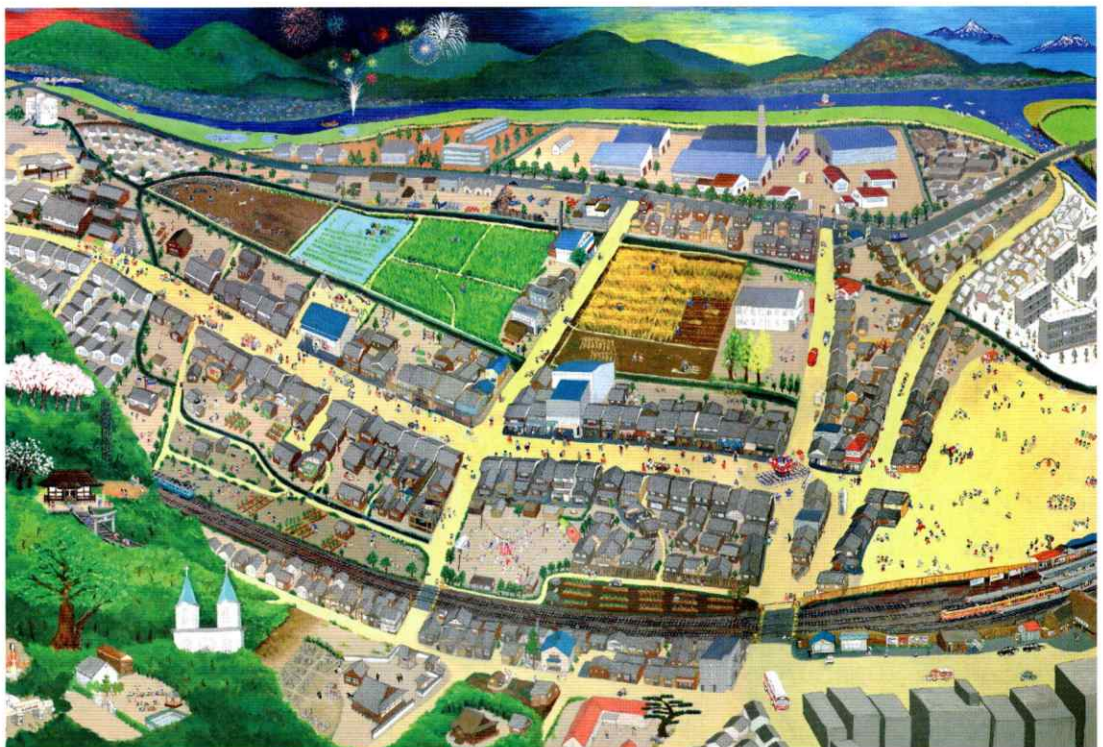
フォーラムではこんな話をさせていただきました。この岡本町ふるさと絵図の最初の目的はエコな暮らしが実践されていたふるさとをの姿をタイムスリップして子どもたちに見せることでした。でも、ふるさと絵図を眺めながら、ふるさととの歴史、それも遠い昔ではなく、親や祖父母が生きた時代、野山や広場、路地で、日が沈むまで遊びまわっていた子ども頃の頃、昭和の懐かしい時代に思いをはせて皆で語

り合うのも、楽しいことだと気づきました。
ふるさと絵図の取り組みが滋賀県から始まり、大阪、京都や神奈川などにも広がっています。ぜひ、いろんな地域のふるさと絵図やふるさと絵屏風を見てみたいものです。

ふるさと絵図解説冊子

A4判37ページ

岡本町ふるさと絵図に描かれている暮らしや遊び、風景、動植物などを短く解説しています。すべてフリガナが付いています。



岡本町ふるさと絵図 (縦180×横270 cm)

歴史上の女性の呼び名

小倉東町 平良 一郎

歴史上の人物について、現代はフルネーム（苗字と諱）で呼ぶことになっていきます。源頼朝、足利尊氏、徳川家康といった呼び方です。ただし、これは男性だけのことで、女性についてはこのような呼び名は極めて少ないようです。私の知る限りでは、北条政子、日野富子、京極龍子、藤原菓子、村山たか…、くらいでしょうか。

実名で呼ばない時代

昔、貴人は男女ともに実名で呼ばれることがほとんどなかったようです。住所、屋敷、職業、官職、法名、院号などで呼ばれていました。

例えば「治部」（石田治部少輔三成）、「判官」（源九郎判官義経）、「吉良上野」（吉良上野介義央）などの呼称です。同

様に女性も「淀殿」、「北政所」、「春日局」などの通称が一般的でした。

現在も残る不平等

ところが現代では、男性に対しては本名で、女性に対しては当時の通称のままになっています。また、接頭敬語「お」や、「方」「殿」「姫」などの敬称が付いたり、なかつたりしています。その敬称にしても、「淀君」のように遊女に使う敬称を付けられている事例もあります。

女性に対しても、男性と同じように本名で呼ぶべきではないでしょうか。男性には本名で、女性には通称では不平等なように思います。

これは日本だけのことではありません。欧米においても男女同権があまり進んでいな

かった20世紀後半頃までは女性には通称で呼ばれていました。

例えば「アングル・トムの小屋」の著者ハリエット・ピーチャー・ストウは、以前はストウ夫人 (Mrs. Stowe) と呼ばれていました。私も小学生の頃にそのように教えられました。また、ノーベル賞の物理学賞と化学賞を受けたキュリー夫人は、マリイ・キュリーといわれるようになりました。

明治民法前は夫婦別姓

明治31年の明治民法の施行以前、わが国では女性が嫁いでも実家の苗字のままの夫婦別姓制だったので、このルールに従う必要があります。

このことを知らない人がいるらしく、前田まつ、細川玉

といった嫁ぎ先の姓で呼ぶことがありますが、これは間違いです。

北条政子は、源頼朝と結婚しても源政子とはならず北条政子のままですし、日野富子は足利義政に嫁いでも足利富子にはなりません。

さらにフルネームでなければ、まぎらわしい場合もあります。例えば「お万の方」は、私の知る限りでは歴史上6人います。

そのため、「お万の方」だけでは誰のことかわかりません。徳川家康の側室には「お万の方」が2人います。これがフルネームであれば、同姓同名はめったにありません。

6人のお万の方

○お万の方 小督局、長勝院 ↓永見万（徳川家康の側室）

結城秀康の母、永見吉英の娘

○お万の方 養珠院 ↓ 蔭山万（徳川家康の側室、徳川頼宣・頼房の母、正木頼忠の娘、蔭山氏広の養女）

○お万の方 永光院 ↓ 六条満子（徳川家光の側室、六条有純の娘）

○お万の方 聖光院 ↓ 藤木万（保科正之の継室、藤木弘之の娘）

○お万の方 勢真院 ↓ 平塚万（徳川家斉の側室、平塚為喜の娘）

○お万の方 若御前、駒姫 ↓ 最上万（豊臣秀次の側室、最上義光の娘）

枚方縁の女性の本名

ところで、枚方ゆかりの歴史上の女性は、蹉跎神社の建立縁起をつくった苺屋姫と御茶屋御殿に住んでいた乙御前

くらいでしょうか。

○苺屋姫 ↓ 菅原苺屋（仮名、本名不詳、菅原道真4人の娘、衍子、尚子、寧子、俊子のうち苺屋姫がいずれかは不明）

○乙御前 ↓ 本多乙（豊臣秀吉の側室、本多正康の娘）ということになります。

歴史上の女性の本名

最後に歴史上の有名な女性の本名を思いつくままに順不同でリストアップしてみました。

○淀殿 淀の方、淀君 ↓ 浅井茶々（豊臣秀吉の側室、秀頼の母、浅井長政の娘）

○お市の方 ↓ 織田市（浅井長政の正室、信長の妹、織田信秀の娘）

○北政所 高台院 ↓ 浅野寧々（豊臣秀吉の正室、杉原定利の娘、浅野長勝の養女）

○濃姫 ↓ 斎藤焔蝶（織田信長の正室、斎藤道三の娘）

○紫式部 ↓ 藤原香子（源氏物語の作者、藤原為時の娘）

○清少納言 ↓ 清原諾子（枕草子の作者、清原元輔の娘）

○春日局 ↓ 斎藤福（徳川家光の乳母、稲葉正成の妻、斎藤利三の娘）

○山内一豊の妻 見性院 ↓ 若宮千代（山内一豊の正室、若宮友興の娘）

○出雲阿国 ↓ 中村国（安土桃山時代の舞踊家、中村三右衛門の娘）

○江島 ↓ 白井みよ（大奥女中、江島生島事件の主犯、疋田彦四郎の娘、白井久俊の養女）

○小野小町 ↓ 小野吉子（平安時代の歌人、小野良真の娘）

○二位の尼 ↓ 平時子（平清盛の継室、平宗盛、知盛、徳子の母、平時信の娘）

○細川ガラシア ↓ 明智玉（細

川忠興の正室、明智光秀の娘

○建礼門院↓平徳子(高倉天皇の中宮、安徳天皇の母、平清盛の娘)

○桂昌院 お玉の方↓北大路玉(徳川家光の側室、徳川綱吉の母、北大路宗正の娘)

○吉乃きのみ↓生駒吉乃(織田信長の側室、織田信忠・信雄の母、生駒家宗の娘)

○唐人お吉↓斎藤吉(タウンゼント・ハリスの側室、斎藤市兵衛の娘)

○大蔵卿局 大蔵局↓真野小袖(大野長年の正室、豊臣秀頼の乳母、真野頼包の娘)

○千姫↓徳川千(豊臣秀頼の正室、徳川秀忠の娘)

○築山殿 瀬名姫↓関口瀬名(徳川家康の正室、徳川信康の母、関口親永の娘)

○天秀尼↓豊臣奈阿(東慶寺門主、豊臣秀頼の娘)
○巴御前↓樋口頼絵(源義仲

の側室、樋口兼光の娘)

○芳春院 まつまつ↓篠原まつ(前田利家の正室、前田利長の母、篠原一計の娘)

○篤姫 天璋院↓島津篤子(徳川家定の正室、島津忠剛の娘)



天璋院

○加賀千代女↓福増屋千代

(江戸時代の俳人、福増屋六兵衛の娘)

○儀同三司母ぎどうさんしぼ↓高階貴子(平安時代の歌人、藤原道隆の妻、高階成忠の娘)

新入会員紹介

平成29年10月1日現在

- | | | |
|-----|-------|--------|
| 分島 | 哲さん | 楠葉花園町 |
| 脇本 | 初美さん | 京都市西京区 |
| 町田 | 玲子さん | 楠葉並木 |
| 葉山 | 彰子さん | 寝屋川市 |
| 田畑 | 卿子さん | 東中振 |
| 谷 | 真央さん | 伊加賀西町 |
| 中川 | 雅天さん | 宮之下町 |
| 岡山 | 民男さん | 牧野本町 |
| 岡島 | 強さん | 香里ヶ丘 |
| 藤田 | 貴子さん | 伊加賀北町 |
| 右田 | 紀久恵さん | 楠葉花園町 |
| 佐々木 | 晃子さん | 東山 |
| 小鉢 | 澄代さん | 楠葉朝日 |
| 伊藤 | 民子さん | 香里ヶ丘 |
| 大久保 | 雅弘さん | 寝屋川市 |
| 米津 | 五郎さん | 八幡市 |
| 下田 | 祐さん | 池之宮 |
| 加久保 | 憲司さん | 藤田町 |
| 小林 | 英夫さん | 楠葉花園町 |
| 守田 | 憲さん | 南楠葉 |
| 山原 | 幸子さん | 渚元町 |
| 前田 | 富枝さん | 御殿山町 |

会員を募集しています

本会は、年数回の講演会や観光バスを利用した他宿場などの日帰り見学会、会誌(本誌)を発行しています。会費は3600円(1年度)です。入会をお待ちしています。ご希望の方は上野まで。電話(832)5722。

訃報

本会会員で第四代会長として本会の発展に尽力された田中彰さんが10月5日にお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。